

---

# コードスパイラル

緒久井 稜汰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードスパイラル

### 【Nコード】

N3842K

### 【作者名】

緒久井 稜汰

### 【あらすじ】

知らないことが多すぎるこの世界。人々が知らないところで今日も呪喰霊とコードスパイラルとの壮絶な戦いが繰り広げられていた。彼らの名前はコードスパイラル人間にして怨霊に限りなく近いものたち。

## シローと美沙希（前書き）

初めての投稿であまり言い文章はかけませんでした。自分なりに満足したものが書いていると思いますので、試しにお願いします。

## シローと美沙希

あー何なんだろうかこのたるさ。連休明けっていうのもあるけど、なによりかつたるいんだよな。学校は何のためにあるのかね、必要ないんじゃないの？と言いつつも行かなくてはならないからたまつたもんじゃないぜ。ん、ちょっと待て、もう始まってんの？マジで？おいおい、そういうことは前もって言うといてもらわないと心臓がもたねーよ。これでも表向きは優等生ってことになってんだからさ、そこんとこよろしく頼むよ。

めんどくさいついでにまた来やがった。

おいおいマジかよ、何で学校にくるんだよまったく。この前相手してやったばっかだろうが。美沙希はどこだ？

「来たわね…：どうする？あんたが行ってもいいけど、どうせここはお前だけで十分だ、て言うんでしょ。」

茶色のショートカットのかわいい女の子だ。

「ふん、さすがに十六年間ともにすごしてきた中ではないな、よく分かってるじゃないか。よし、それなら早く行って…：フギャ！」

「うるさい、変な言い方しないで。ただの幼馴染じゃない。」

「いきなり殴るな、それにただの幼馴染なんかじゃないだろ」

「もういいわよ。」

何なんだあいつ、いつもああやって僕に殴りかかってきて、自分が何なのか自覚してないのか。

まあいいあいつの戦いは危なっかしいからな、様子でも見ておいてやるか。

「カアアアアア」

「もう、こんなところで大きな声出さないでよ。周りの人には聞こえてないからいいんだけど…」

シローったら、私の気も知らないで」

ふところから何かを取り出した。まるで木刀のような、でも何でも切れそうなそんな剣を。

「行くわよ神楽。こうなったらあいつに見せてやるんだから」

「カアアアアアア」

「うるさい」

襲ってきた化物の腕を見事に真つ二つに切った。そして間を空けずに第二波、第三波の腕はよけて反撃する。

「ちっ、ここはまずいわね、場所を変えましょ。」

化物の触手をうまくよけながら、裏庭のほうへと誘導して被害を抑えようとした。幸い今は昼休みだったため人気は少ない。

「カアアアア、アア」

「呪喰霊が私たちにたて突こうなんてそもそも間違ってるのよ」

触手をかわしながら言っている言葉なので息が詰まりそうなほど聞こえづらい。

「はああああつ！」

また触手を2本切り落とした。残る触手は五本。

「まったく、きりがないわね、シローが来てくれればこんなことにはならないのに、神楽！ロングフォーム」

刀が長くなつて、霊気も増した。これが刀の開放状態。美沙希たちコードスパイラルはそれぞれのパートナーとも言える刀を持つっており、それぞれに名前と個々の能力を持っている。美沙希の場合、それはこのロングフォームと呼ばれる。霊気で刀を長くし、攻撃力も増すというまさに攻撃型の能力。

「いくわよー！長碑延斬！」

長碑延斬はロングフォームの美沙希が使える、自称必殺技のこと。

「カアアアア」

これで二本の触手が切れた。しかし、隙の大きいこの技を使った後は当然隙ができる。残りの三本のうちの一本が美沙希に襲いかかる。

「鎖斬華！」

一瞬のうちに触手が消えた。切られたというより消えたという表現

のほうが適切だろう。しかしすごい威力だ、美沙希の十倍、いや三十倍は火力が違う。

「切るんだったら、このくらいにしなくちゃ」

「シロー、バカなんで来たのよ、こんなやつ私一人で十分って言うたじゃない」

「十分じゃないから来たんだよ」

「あなたずっと見ていたのね、あれだけめんどくさいって言ったのに」

「だから言っただろ十分じゃなかった。案の定こうなったわけだし」  
「うっ、だからって影からこそそそ見なくたって…シロー後ろ！」

二人をよそに怨霊が残りの二本の触手で攻撃してきた。だが美沙希の心配は及ばなかった。

「誰に言っただ？まさか僕じゃないだろうな？」

そう、さっきのようにただ今回は触手二本だけでなく、一瞬で怨霊の本体まで粉々になった。

「き、気づいてないと思ったのよ。それより行きましょ、午後の授業が始まっちゃうわ。痛っ！！」

立ち上がるうとしたとき、美沙希は足を押さえてまた座った。

「痛たた。足くじいたみたい。先に帰ってて。私は遅れていくから…って何すんのよ」

「まったく世話のやけるやつだ、保健室は二回だったか？」

傷ついた実沙希をおぶってシローはそう呟いた。背中で美沙希が何か言っているけれども無視。

「ねえ、シロー」

「何だよ文句は保健室で聞いてやるよ」

「ありがとう」

「いきなりなんだよ」

このあと二人が午後の授業に遅れたのは言うまでもない。クラスメイトにいじられた後、二人仲良く廊下に立たされてしまった。

彼らの名前はコードスパイラル。彼らにしか扱えない特別な刀を持

ち、どこからともなく現れる呪喰霊と呼ばれているやつらと戦う。  
彼らはそれが宿命なのだ。呪喰霊を倒すことが逃れられない、スパ  
イラルなのだ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3842k/>

---

コードスパイラル

2010年10月9日04時55分発行